

寒くなったころの生活のあと ... とくに少なくなる家の遺跡

寒くなってきた4,000年前ころから、遺跡の数、とくに家のあとがめっきり減ります。一方で、墓のあととはたくさん見つかっています。

このころには、十勝だけでなく日本列島東部全体で遺跡の数が少なくなっています。やはり、寒くなったことが理由のようです。

ただ、墓はつくるけれど近くに人は住んでいない、ということはあまり考えられません。

それまでの遺跡があった「川を見下ろす丘のへり」ではなく、もう少し低い「斜面の途中」や「川に近い場所」で暮らすようになったのかも知れません。

池田町の「池田3遺跡」は、もともとの十勝川と利別川の合流点近く、今の利別川の堤防から見下ろすことのできる、清見二線川ぞいの低い場所にあります。



(上)利別川上空から見た発掘している時の池田3遺跡。
(写真:池田町教育委員会蔵)



(右)池田3遺跡の位置。
池田町字西2条3丁目。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

縄文時代の墓 ... 体をおり曲げる



縄文時代の埋葬のようす(小林遺跡の墓をもとにしている)。
(イラスト:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 3)



いろいろなものが入られていた墓。ここでも赤い顔料(ベンガラ:右写真)が見つかる。(大正8遺跡:帯広市)(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

縄文時代の墓は、多くが地面に穴をほって亡きがらうめたものです(土壙墓という)。屈葬といって、亡きがらが、ひざをかかえるような形におり曲げられています。

副葬品として、石器などがいっしょにうめられることもよくあり、小林遺跡(芽室町: p95)の墓からは、Cの形をした耳かざり(塊状耳かざり)が見つかっています。また、この墓からはベンガラという赤い顔料が見つかっていて、墓穴の底が赤くぬらされていたようです。

また、そのほかの遺跡からは、石でうめられたもの、焼かれた土でうめられたもの、黒曜石のかけらがいっぱい入った土でうめられたもの、石器がたくさん入れられたもの、石器がたくさん入れられたもの、なにも入れられていないもの、など、さまざまなタイプの墓が見つかっています。

決まった場所に墓がいくつも作られるようになるのは、およそ6,000年前からのことです。小林遺跡では6つの墓が集中していました。また、札内N遺跡(幕別町: p97)では、およそ2,500年前の墓が100以上集中してつくられていました。

相生1遺跡(音更町: p96)で見つかった墓では、埋葬の時にイノシシ・ワシ・魚を焼き、その焼けた骨といっしょに土でうめる、ということがおこなわれていたようです。このことは、埋葬する時に儀式(葬儀・葬式)がおこなわれたことを想像させます。

1 もともとの十勝川(もともとのとかちがわ): 統内新水路(とうないしんすいり)完成の昭和12年(1937)まで、十勝川は今のオシタツ川下流部を流れていて、利別川は池田町利別南町で合流していた。(統内新水路 p190)

2 副葬品(ふくそうひん): 亡きがらといっしょに墓に入れられるもの。

3 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひやくねんきねんかんまいざうぶんかざいセンター): 帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館